こども園

０歳児・３歳児・５歳児　４月～

五條市立みらいこども園

はばたくなら ①

夢と希望をもって、未来にはばたく子どもをめざして

～日々の保育の振り返りから～

取組について

■令和４年度より、５か所の園がひとつのこども園「みらいこども園」として開園することになった。地域性の異なる園所から登園してくるため、開園１年目の特に１学期は、園児・保護者・職員のみんなが新しい環境の中であわただしい日々を過ごしていた。そのため、園児同士も環境の変化に落ち着かず、保護者も戸惑いや不安も見られた。職員同士も施設の使い方や園児数が多い園を初めて経験するなど、手探りの中で保育をしている状況であった。また園行事や参観・地域との交流などもこれまでの繋がりを大切にしながら話し合いをしていった。

■２学期になり、全職員が運動会という一つの目標に向かって活動を始めたことや園児たちも新しい環境に慣れてきたこともあり、少しずつ落ち着いて保育が進むようになっていった。その反面、職員の教育・保育の悩みや職員同士の連携の難しさが課題になり、１号認定児と２号認定児の教育時間と保育時間についても職員間で意思統一をしていった。

■開園２年目をむかえ、みらいこども園としてどんな子どもを目指すのかを考え、全職員が同じ目線で保育をすることができるように職員研修を計画した。その中で初めての試みとして、正規職員だけでなく全職員を対象に子どもの主体性や考える力を身に付けようと、日々の保育の振り返りをしていくことにした。全職員がワンチームを目指すために、「フォトチャット研修」に取り組んだ。

■フォトチャット研修は、子どもの日々の遊びや生活の姿から、研修で考え合える場面と感じたら動画や写真、メモで残しておき、それを教材として職員同士がそれぞれの思いを出し合うもので、正解はなくどんなことでも出し合うことが大事という主旨のもとで進めていった。こども園では研修時間が取りにくいので、短時間で有意義に行える方法を模索し、６０分間に２グループが交代で同じ写真や動画を見て意見交換をしていった。同じ教材で学ぶことで共通の課題ができ、回数を重ねるごとに子どもたちの活動の捉え方や支援の仕方などについて互いに考えられるようになっていった。

取組を通して

〇子どもの主体性を大切にした活動とは、子どもたちの力を信じ、保育教諭の温かな眼差しの中で、子どもたちが夢中になって遊ぶこと。また、その中でゴタゴタ、モタモタしている時こそ自分のしたいことを思う存分出来ている時だということが分かった。このような経験を繰り返し、積み重ねていくことが、就学以降の子どもの生きる力の基盤になっていくのではないかと感じた。

〇フォトチャット研修をきっかけに、０歳児～５歳児までのクラスの事例を書いて、子どもたちの姿や保育を振り返り、保育教諭の関わり方によってどう変容したかなどを写真や解説を入れて学年ごとに研修を深めた。このことは、実際に書くことから見えてくることもあり、学んだことや改善点などが明確になった。

実践事例　「信頼関係を深め安心できる場所へ」　０歳児

子どもの姿

初めは保護者から離れ、新しい環境で過ごすことに戸惑い泣いたり、食事の時に寝てしまう子や朝寝の必要な子がいたりと、一人一人の生活リズムの違いもあった。保護者との連携を大切にし、慣らし保育を行いながら園生活を安心して送れるように心掛けた。

「どんないろがすき」の絵本を一緒に歌いながら読んでいると安心した表情で手を動かし、次のページをめくって欲しいと欲求を伝える姿が見られた。

家では歩けるようになったと聞いていたが、園では座っている事が多かったため、立たないとボールが入れられない高さのあるボール転がしで遊ぶことにした。

保育教諭とわらべうたや手遊びでスキンシップをとると、触れ合うことには慣れてない様子であったが、歌が好きなことが分かった。

もう一回歌ってと膝をとんとんする

保育教諭とゆったり二人で遊んでいる時に初めて笑顔が見られた

《保育の振り返り》
〇保育教諭は子どもが安心できる居場所となり、自ら身近なものに親しみをもち、興味や好奇心を広げていけるように、これからも応答的な温かい関わりを大切にしていきたい。
〇生活の中のいろいろな物に触れる機会を大切にし、色や音、形、手触りなどの感覚を豊かにできる遊びを取り入れていきたい。そして多様な感情を受け止め、一人一人に応じた援助を心掛けたい。

実践事例　「上靴どこ？」　３歳児

子どもの姿

新入園児は慣れない環境に、登園を嫌がったり泣いたりする姿があった。進級児も泣く子もいたが、２歳児の時の担任や友達がいれば安心して活動していた。しかし２歳児クラスでの生活の流れと大きく違うことに戸惑う姿が見られ、初めの頃は好きな遊びにも消極的であった。そこで子どもたちが思わず遊びたくなる環境を整えたり、保育教諭が誘いかけたりすると、徐々に自分で好きな遊びを楽しめるようになっていった。

４月当初、トイレやコーナーから帰ってくると上靴を履いていないことや、活動への移動に時間がかかり手間取る姿があった。

～保護者からの相談～
「２歳児クラスの時は泣かずに登園していたのに、最近泣くんです。」

なぜ上靴を履くのを忘れたり、移動するのに時間がかかるのだろう？２歳児の時に裸足保育だったからかな？

２歳児クラスは担当制を取り入れていたことや３歳児クラスでの1日の流れの違いを説明し、「環境に慣れるまで見守って欲しい」と言ったが、本来、園児の実態に合わせて環境を整えなければならないと反省した。

《保育の振り返り》
〇３歳児は自立への願いから、生活形態が集団としての活動に大きく変わっていく。しかし保護者の声や子どもの戸惑う姿から、不安やストレスを感じていることがわかり“なぜだろう？”と振り返った時、特に生活習慣面で大きく違いがあることに気付いた。そこで、２歳児から３歳児へのなめらかな接続となるように、担当制から集団になるという概念を崩して保育を考える話し合いをもっていくことになった。

実践事例「段ボールがなくなったよ！」　5歳児

子どもの姿　　環境構成・援助

子どもの姿
進級当時は、年長児になった喜びを感じ新しい環境での生活を楽しむ子や、クラス替えで不安そうな姿の子も見られた。また、いろいろな事に興味をもつが、うまくいかない、わからないことは自分で考えようとせず、「やってー」と保育教諭に解決してもらおうとし、指示を待つ姿が気になった。
また、自分の思いを通そうとし、相手の気持ちに気付けずぶつかる事があった。そして、うまくいかないとすぐに諦め、遊びが長続きしなかった。

これ、使って いい？

主体的に取り組んでほしい、何か遊びにつながらないかなという思いから、登園前に段ボール箱を置いてみた。

興味をもった子が組み立て始め、箱型にして、中に入ってトンネルのようにくぐって遊び始めた。

自分たちで考え工夫してほしいと思い、上手くいかない時も友達に相談してみたらと声を掛け、見守る。

段ボールをつなぐ時に棚の中から様々なテープを見つけてきて、つないでみると、それぞれの特性に気付く。

・セロハンテープはすぐに外れる。
・ガムテープはよくくっつくが、重なると外れる。
・養生テープはよくくっつくが、切りにくい。

保育室の端で行き止まりになり、どうしようと友達と相談する。相談された子も一緒に遊び始める。色々な遊びの提案がうまれ、集中して遊ぶ姿が見られる。

・横につなげたらいい。　・上に窓を開けたら？
・箱のここを切ったら長くなるし、こうしたら丸くなるよ！
・廃材を探しに行き、これも使えそうと意欲的に動き出す。
・帰る直前まで段ボールで遊ぶ姿が出てきた。

「段ボールがなくなった！」
「帰ったら聞いてみるわ。
明日持ってくるよ。」

段ボールを増やすために、相談したことで、家庭から持ち寄ることとなり、クラスの子どもたちへの関心も広がっていった。箱をつなぐ際には、互いに協力をして作る姿や、それぞれのトンネルをグループ同士でくっつけて大きくするなど友達とつながり、もっと遊びたいという気持ちも見られるようになっていった。

《保育の振り返り》
〇子どもたちが興味をもっても、すぐに段ボールを使わないことや、困っても言葉に出せないことは、保育教諭の指示を待っていたのか、子どもの気持ちを先回りして準備をしてしまっていたのではないかと反省をした。自分のやりたいことを思う存分に出来るためには、見守るだけでなく、子どもの思いを読み取り、一緒に楽しもうとする保育教諭の姿勢も大切であると思った。
〇5歳児は、試行錯誤したり友達の行動や言葉などに刺激を受けたりしながら、楽しく学ぶことが必要である。友達がいたから出来た、友達と一緒が楽しいと思える経験を、これからもたくさん積み上げていけるように努力していきたい。

まとめ

（成果）

■職員が“主体的な子どもを育てる”という同じ視点で教育・保育に向かうことにより、園で起きていることを自分事に捉えるようになってきた。また、自分の立ち位置を考え、役割分担等が自然にできてきて職員体制が整ってきた。そして子どもたちの様々な思いや考えに触れた時、職員同士で一緒に悩んだり喜んだりできるようになった。それが子どもたちの安心できる場所に繋がっていくことが分かった。

■保育を写真や動画のデータに残すことは、保育の最良の振り返りになると実感した。また、保育に行き詰った時など他の職員の様々な考え方や捉え方が聞けて、次の保育へと繋げていけると感じている。現在は、写真や映像が無くても職員が自然と保育の振り返りをし、子どもたちのことや出来事で気になることを話し合い、明日の保育を楽しみにする場面を見かけるようになっている。

（課題）

■今後も園の実態に応じて「どのような子どもを育めばよいのか」をいつも問いかけながら、保育教諭の負担にならず、楽しんで子どもの姿を追えるように研修内容を模索していきたい。

■子どもの姿や研修で学んだことは、記憶に残すだけでなく、記録に残せるような研修を継続し、事例の提出については、それぞれの保育教諭の個性を大切にしながらみんなで検討し合い、互いに良い所を認め合い、切磋琢磨していけるよう、みんなで自分事と捉えて取り組んでいきたい。

■これからもこども園の取組を、保護者や地域の人たちにも理解し協力をしてもらえるよう、全職員の声も取り入れながら、わかりやすい情報発信の工夫を心掛けていきたい。